

—〈書評〉—

深尾葉子著 大阪大学出版会

『黄砂の越境マネジメント——
黄土・植林・援助を問いなおす』

(中国研究所) 杉山 文彦

「黄砂の越境マネジメント」という表題は少々分かりにくかったが、副題とカバーに印刷された黄土高原の写真にひかれて読み始めた。読み進むうちに、その意味するところが分かったような気がする。分かると共に本書の面白さは増してくる。「越境マネジメント」とは自己の知的フレームを越え、その外に出て活動することである。外に出た著者が我々に見せてくれるものは、これまでの中国に関する通念を覆すに十分であり、様々な知的関心を引き起こさせる。

先ず本書の構成を紹介しておこう。本書は2部10章から成っている。せっちな人には第2部から読み始めることをお勧めする。

- 第1部 黄砂・黄土・植林をめぐるバイアス
 - 第1章 日本の黄砂情報と黄砂をめぐる誤解
 - 第2章 黄砂とは何か、何処から来るのか
 - 第3章 砂漠緑化の功罪
- 第2部 黄砂の発生する地域における人と自然の関わり
 - 第4章 里山としての黄土高原
 - 第5章 黄土高原の空間構造がつくるコミュニケーション・パターン
 - 第6章 黄土高原における「交換」と人間関係の形成プロセス
 - 第7章 人間のコミュニケーションが生み出す「緑」
 - 第8章 「利益」を顧みない人々の手法
 - 第9章 開発援助プロジェクトの予測不可能性
 - 第10章 黄土高原で経験した「枠組み外し」の旅

第1部は、黄砂や砂漠緑化に対する既成のフレームに囚われた理解（実は誤解）に対する批判と啓蒙である。日本では、黄砂は中国やモンゴルの砂漠の砂が風で巻き上げられて飛んでくるものと一般に思われているが、砂漠の砂は粒子が大きくとても日本までは飛来しないこと、日本では黄砂と表現しているが実際は砂よりもずっと粒の小さいダストであって、砂漠というより砂漠周辺の農地や道路、開墾や過放牧によって地表の草や地衣類を剥ぎ取られ砂漠化しつつある草原から舞い上がり飛来すること等が、詳細に説明されている。

黄砂現象というと細かな砂が風で巻き上げられる自然現象と捉えがちであるが、その背景として商品経済の浸透によって商品価値の高まった植物や地衣類の採取、無理な開墾や過放牧といった人為的要因を考えなければならぬこと。また、我々日本人は自らを、飛来する黄砂を蒙る被害者としてのみ考えがちであるが、日中の経済関係を見ると事はそう単純ではない。日本のスーパーで安く売られているモヤシの原料である緑豆の多くは、黄土高原で黄砂を巻き上げる春耕によって植え付けられたものである。昔に比べると安く手に入るようになったカシミヤの衣服は、内モンゴルやチベットの草原荒廃の原因となっている。市場経済化の進展によって現金収入が必要となった牧民は、商品価値の高いカシミヤ山羊の飼育頭数を増やすが、草を根まで食べてしまう山羊の頭数を増やすことは草原に大きな負荷をかける。このように日本も黄砂発生の原因の一部になっていることが指摘されている。

このような既成のフレームに囚われた理解によって黄砂や砂漠化に対する策が立てられると、それは効果をあげないばかりか、事態をより悪化させることにもなる。その例の一つとして2002年にNHKの人気番組プロジェクトX「中国砂漠、執念の緑化」で取り上げられた遠山正瑛鳥取大学名

菅教授が内モンゴルで行った「ポプラ300万本計画」が挙げられている。もともと森の無かった所に、成長に多くの水を要するポプラの森を作るとは、貴重な地下水の浪費である。牧民が家畜を放牧していた土地に森を作るとは、牧民の生活文化の破壊につながる。遠山正瑛のやり方は、現地の場合とはかかわりなしに形成された自己の知的フレームに立てこもり、自分の価値観を現地に押し付ける謂わば「緑色帝国主義」と批判されている。

実は評者も、あのプロジェクトXを見て感動し、その後数年間、内モンゴルのクブチ砂漠の周辺に村に砂漠緑化の手伝いに通ったものだが、現地で聞く遠山正瑛の評判はあまり芳しくなかった。ただ、深尾氏は遠山正瑛の功績についても指摘することを忘れない。砂漠の拡大に敢然と立ち向かった遠山正瑛の姿に、現地の人々は深い感銘を受け緑化活動へと向かった。

「緑色帝国主義」的性格は中国政府の政策にも見られる。砂漠緑化を森林化と考えるのは農耕社会の価値観の押し付けである。砂漠化防止のため政府が打ち出す放牧禁止や牧民の定住化の措置は、千年以上にわたって草原を生活の場とし草原を維持してきた人々の生活文化の否定である。本書に引用されているモンゴル族知識人の発言は、自分たちの生活基盤と文化を否定された者の悲痛な叫びのように読めた。

深尾氏は直接言及してはいないが、この問題は突き詰めると人類の歴史を低次から高次への進歩発展の過程と考える近代主義的世界観の問題に突き当たるであろう。今や中国においても主体的に思考する知識人は、このように単純に考えてはいないだろう。しかし、中国は長らく近代主義の権化ともいえるマルクス・レーニン主義の発展段階論を歴史教育の中心に据えてきた（おそらく現在でもそうであろう）だけに、このドグマによる「帝国主義」の押し付けは根が深い。

第1部が啓蒙を主目的としたため詳細・親切ではあるが説明的でやや平板な感じを免れないのに対し、第2部は1990年代初めより陝西省北部の黄土高原に入り研究と活動を続ける深尾氏が、自己の知的フレームから越境することによって発見したことの記述であり、躍動感に満ちている。

深尾氏によれば、黄土高原に刻まれた谷あいの村は、一見互いに孤立しているように見えるが、幾重にも分かれた枝が幹へと繋がっているように、谷筋に沿って村から町、町から都市へと互いに繋がっている。そのルートを通って村から都市へ、都市から村へと、噂や情報は数百キロもの間をたちどころに駆け抜ける。町や村には人の集まる情報ステーションがあり、人々はその噂話に興じながら生活に必要な情報を入手する。

村の中で家の建設や婚礼といった大きな行事をこなす場合、人は互酬と雇用の二つのやり方でそれを乗り切る。すなわち、互いに親しくいつでも互いに労働力を交換できる関係にある者には「相夥」と呼ばれる無償労働を期待できる、そうでない者に頼むときは「雇」という金銭による雇用による。その手間賃の相場を知るためにも常に情報を仕入れておかねばならない。同じ現場に「相夥」による者と「雇」による者が共に働く場合もあり、また場合によっては一人の人物が「相夥」と「雇」の両方で一つの仕事を請け負うこともあるという。この「相夥」と「雇」の使い分けは大変微妙なものが有る様で、それを見出した観察眼には驚かされるが、こうしてみると陝北の農村では互酬的な共同性と雇用による市場経済性が共存していることになる。中国の農村が共同体であるか否かは、確か中国史研究の大きなテーマの一つであったと思うが、この場合それはどうなるのであろうか。ここに見られる地域社会のありようは、共同性と市場性が一つに溶け合い、状況に応じて形を変える不定形な集団である。

深尾氏によれば、日本や教会コミュニティを基礎とした西欧のような集団型社会においては、金銭を介する「市場経済」と互酬性を基礎とする「贈与経済」とを二分して考えがちであるが、中国やイスラム世界のようなネットワーク型社会においては、「友人関係の中に金銭が入り込み、市場関係の中に個人的互酬関係が入り込む。そして、金銭による交換関係と、金銭によらない互酬関係が、相互に矛盾することなく人々の関係の網の目の中で共存する」(195頁)のである。

このような陝北の社会で大きな役割を果たすものとして取り上げられるのが「廟会」である。1980年代、改革開放政策が実施されると雨後の筍のように陝北各地で活動を再開した「廟」は、日本の神社の氏子や寺の檀家のように地縁血縁によった固定的なものではなく、その廟が靈驗あらたかであるか否か、廟会の運営が公正に行われているか否かに関し、評判が良ければ数百キロの範囲から人が集まり、悪ければ去って行く。大きな廟になると豊富なお布施によって、盛大な祭りを行うだけでなく、福祉、教育、治水、治安の活動もするという。こうなると政府や共産党との関係は、どうなっているのだろうかと思うが、本書の記述によれば、廟と政府・共産党との関係は薄く独立を保っているようである。廟会の運営に当たる「会長」や幹部たちは、みな無償でその任に当たり、行事に集まる人々も廟の靈驗との「相夥」によって、やはり無償で労働を提供するという。中には数百キロ離れた町から無償奉仕に来る者もいるというから驚きである。

この廟の活動の中に緑化活動を組み込み大きな成功を収めた人物として「緑聖」と言われた朱序弼という人物が詳しく紹介されているが、彼も廟の活動からは一切金銭を受け取らず、林業科学研究所からの安い給料で生涯を過ごした。このほかにも、私的利益を図ることなく緑化や公共のために活動する人物の例が、日本人も含めて複数紹介

されていて、拝金主義が横行すると言われる中国にも、それとは違った価値体系が生きていることを思わせる。

さらに本書では開発援助プロジェクトの問題点が指摘され、その具体例として深尾氏も深くかかわった糞尿処理施設が失敗例として挙げられている。一方、当初全く予期しなかった効果を生んだ例として、陝北に入った一人の日本人研究者が、地域から機械化によりロバの姿が消えて行くのを寂しがり、ロバを一頭買って飼い始めたことから、伝統的形式の結婚式が復活し、地域に新たなブライダル産業が成立したということが紹介されている。これはまるで「風が吹けば桶屋が儲かる」を地で行くような話であり、さらにこれには今や著名な日本人の女性研究者が関わっているのであるが、そのあたりは読んでのお楽しみとしておこう。

以上、本書は読んで面白く、また中国に対する日本人の通念に改変を迫るに十分な内容を持つものである。その上で新たに引き起こされる関心について述べてみたい。

まず、著者は陝西省北部の社会の在り方を、その地方特有の地理的条件と結びつけて考えているようであるが、中国の他の地域ではどうであろうか。中国がネットワーク型社会であるとすれば、それは陝北に限られるものではあるまい。他の地域ではどのような様相を呈するのであろうか。

それから、通信手段が飛躍的に発達し、都市化が進展する現在さらには今後、陝北の社会はどうなっていくのか。

また、改革開放以前の人民公社時代、特に文化大革命期には廟の活動は弾圧されていたはずであるが、その間どのように廟の精神は維持されたのか。

さらに、本書が画き出す社会は流動的で自由で、とても共産党の独裁なぞ受け入れそうもないように見えるが、その辺りの関係はどうか。本書には共産党はほとんど登場していない。

(2018年9月刊、362ページ、本体2,300円+税)